

Title	考古學研究室の寄贈資料について
Sub Title	
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1956
Jtitle	史学 Vol.29, No.1 (1956. 5) ,p.94- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560500-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日の官令によるから、この型の葉書の行はれたのは約一年半ばかりの間である。

この記述に誤りはないが、この一年半ばかりの間に同じ型式で印刷の異なるものが三種類発行されたことを、昭和三十年二月中旬神田三省堂に開かれた郵便切手展覽會を見て松本保平氏の出品により知つたからこゝに補足しておく。

明治六年十二月一日に發行されたものは、蒐集家の間で俗に「べにわく」と呼ばれているもので、第一面のオーナメント野粹が紅刷りで、左脇の「郵便はがき印紙」の文字のないものである。市内半錢の料額印面が黄色、全國壹錢の料額印面が青色で刷つてある。

同年十二月(日不詳)第二回目に發行されたものが、前記福澤文献の一つとなつた第一面青刷りの葉書である。これには左脇に「郵便はがき印紙」の文字がついているので、俗にこれを「脇付はがき」と呼ぶ。市内半錢のものは見ないが、これは或は第一面の刷り色が違ふのかも知れない。

更に明治七年四月一日に、左脇の「郵便はがき印紙」の文字のないものが發行された。これを俗に「脇なしはがき」と呼ぶ。市内半錢の料額のものには紅刷り、全國壹錢の料額のものには青刷りである。最初の「べにわく」と見違える虞れがあるが、料額印面に「郵便切手」とあるのが、「郵便はがき」と改まつている點が大

きな相違である。

前記福澤文献の葉書は「脇付」であるが、これは發行期間が甚だ短かつたという。福澤の葉書の日附を見ると「脇なし」の發行された後に使用されている。郵便役所に「脇付」の賣れ残りがあつたのを買つたのかも知れないが、福澤が葉書一枚買ひをしたとも思はれないから、買ひ置きのものを使用したと見る方が妥當であらう。さうすれば、まだ外にも福澤の使つた葉書はあつた筈である。どこかに保存されたものが出て来ないものであらうか。

考古學研究室の寄贈資料について

昭和十一年における日吉矢上古墳の發掘を契機として急速な發展充實を見せつた我文學部考古學研究室も、疎開寸前の戦災によつて所藏資料の大半を失ひ、主要なものとしては、わづかに國寶秋草文壺、矢上古墳出土品を初め、日吉周邊の彌生式、古墳遺物、中國出土資料の一部等を止めるにすぎぬ状態で終戦を迎えた。しかしながら戦後の困難な状態の中において、松本信廣教授を中心に鋭意再建の歩が進められ、藤田亮策講師の力強い援助と相俟つて、今日では戦前を遙かに凌駕する充實振りが見られるに至つたことは、まことに喜ばしい限りである。ただし、それは我々の仕事に深き理解を寄せられ、絶大の支援を與えられた多

くの方々の力に俟つところが甚だ大きい。從來折にふれて感謝の微意を表しては来たが、此の度松本教授のお奨めに従い、特に研究資料の寄贈に關するものを本誌上に公にし、改めて深甚の感謝を捧げると共に、その中の主要なものについて若干の解説を加え、廣く資料の活用を計る一助としたと思うのである。以下解説を附したものを先とし、便宜上品目の如何を問わず寄贈者毎に五十音順に配列し、筆を進めてゆきたい。

赤星 五郎氏

樂浪出土漢式鏡五面（内行花文精白鏡、長豆子孫内行花文鏡、繪模様帶神獸鏡、盤龍鏡、獸帶鏡）、唐鏡六面（俊貺鏡、五月五日鏡、海獸葡萄鏡二面、寶相華八稜鏡、雙鳳雙獸八稜鏡）これらは氏の岳父故守屋孝藏氏の舊藏品で、鏡鑑として優秀なものであるばかりでなく、特に樂浪古墳群出土鏡はその數も多からず、容易に入手しがたいものであることは喋々するまでもない。五面の多きを座右に置くことを得たのは特筆すべきである。

磚七個。すべて朝鮮出土と傳えるもので、幾何學文を飾り、中國出土の漢代磚と對比研究する上に重要である。またギリシヤ陶器皿一個は我國に將來された類品が乏しく、貴重である。外に明刀錢一個がある。

泉山 吉果氏

再度に互り青森縣下北半島尻屋崎附近で蒐集された縄文文化の石器類一〇三四個を寄贈された。石鏃石匙を初めとする小形銅片石器が大部分であるが、數量の多い點からこの地方の縄文文化研究上益するところが大きい。

岩田 虎太郎氏

彌生式土器（不完品）六〇個。熱田高藏貝塚で自身發掘された、いわゆる熱田式土器である。王平在銘磚一個。學界に廣く知られた樂浪王平墓の磚である。鐵鍬四個、鐵鍵一個、磁器皿三個。朝鮮江原道春川の古墓出土の一括遺物で、高麗時代の類例少き遺物である。これらは全て朝鮮考古學研究に重要な資料であつて、赤星氏の寄贈品と相俟つて、本研究室の新しい活動の基礎を築いたものと云えよう。

上野 広一氏

氏が幼少の頃より五十年に互つて蒐集されたコレクションを一括寄贈されたものである。現在なお整理中で詳細な點數を示し得ないが、完形土器一六個、土製耳飾等約三〇個、土偶一五個、大形石器（石斧、石棒等）約一二〇個、小形石器（石鏃石匙類）約三〇〇個と見られ、外に縄文式土器片多數がある。完形土器は一個の彌生式土器を除いて全て縄文式土器であり、諏訪周邊の中期の土器が多い。中には尖石遺蹟出土品も含まれている。石器は諏訪附近の外に、氏の郷里岩手縣鶯宿町附近のもの

のが大部分で、特に鱧付異形石棒と假稱している石器は珍らしい。なお本コレクションの寄贈に際しては、塾員井出佐重、服部禮次郎兩氏の盡力による所が多かつたことを特記する。

大久保 右次氏

氏の住地に近い栃木縣下都賀郡屋村の土師聚落址から自ら發掘した古式の土師器十一個は、最近活潑となつた土師器の編年研究、或は地域的研究に重要な資料を提供するものである。外に石製模造品、埴輪、土彈、石器類など同じ地域の各種遺物を寄贈されている。

大阪谷 良郎氏

青森縣三戸郡名川町寺下遺蹟の一括遺物として龜ヶ岡式土器二九個、石器六二個、便化土偶を含む土製品等三三個に及んでいる。正規の發掘によるものではないが、ほぼ此の遺蹟の全貌を窺うことが出来る。土器には大洞B-C、CI式の優品が多い。また全町平貝塚出土品七點等をも寄贈されている。

賀川 光夫氏

大宰府都府樓址、大分縣虛空藏廢寺出土古瓦各一點は共に奈良時代及白鳳様式の優品であり、後者と伴出の磚佛は小品ながら、極めて珍らしい遺物である。また銅戈は典型的な廣鋒銅戈として、優れた資料である。他に彌生式壺形土器をも寄贈されている。

川島 守一氏

我々の研究に對し、終戦直後から長年に亘つて支援を與えられ、寄贈の資料も左の如く多量に上つている。即ち縄文文化關係には群馬縣伊奈良村板倉沼出土の一括遺物があり、特に土製耳飾二一個は優秀なコレクションである。彌生式土器には群馬縣殖蓮村の靱痕壓痕あるもの、栃木縣久野村出土の珍しい接觸様式の小壺が著しい。古墳文化關係では栃木縣三重村牛塚古墳出土の埴輪男子像がすぐれ、群馬縣九合村男體山古墳出土と傳える石釧、車輪石五個も特筆に價するし、足利市織姫山頂古墳出土と云われる仿製鏡、銅釧、三重村今福古墳群出土一括遺物などがある。歴史時代に入つては經筒、綠釉皿、燈明皿の類があり、銅造毘沙門天像、坪井正五郎氏書簡の類に及んでいる。

島田 久吉氏

研究室にある古陶磁類の殆んどが氏の好意によるものであつて、中國の漢、隋唐、宋など各時代の優品十一個を數え、別に漢代明器鶏の雌雄一對がある。

鷹屋敷 謙次郎氏

青森縣八戸市附近出土の石器類で、青龍刀石器は類まれな逸品であり、鱧付異形石棒、鋸狀石器も特記すべきものである。

津田 久氏

殷墟出土白色土器片七個は故守屋孝藏氏の舊藏品で、特に精

緻な文様に他の比肩を許さぬものがある。

西岡 秀雄氏

觸角式銅劍一個。かの著名な長崎縣柏崎出土に次ぐ第二例として注目を浴びている。特にほぼ完形を存している點は前者より優れている。惜しむらくは出土地を明かにしない。

原田 昌亮氏

千葉縣大總村谷臺發見の漆塗竹製櫛は繩文式加曾利B式土器に伴出したもの。齒の部分もよく残存している點で稀有の資料である。

松平 義人氏

北海道遠輕附近出土の黒曜石製大形石器四個は舊石器の可能性あるもの、又同張碓附近採集の石冠、石砥類など地味ではあるが學術上注目すべき資料が多い。

村上 正名氏

廣島縣下廢寺址出土古瓦類並びに須惠器七個は地方的比較研究の重要資料である。

鎗田 欣治氏

千葉縣山武郡下の石器類十點の中には、扁平異形の石劍、挟入石斧、小形扁平ノミ形斧、異形磨製石斧などの珍しい遺物を含んでいる。

相澤 忠洋氏

群馬縣生品村二ツ山古墳埴輪（人物、家型、等）。

東 登氏

骨角器 三個。（岩手縣大船渡市大洞貝塚出土）。

荒川 輝義氏

土師器三個。（茨城縣石下町小貝川河床發見）。

石下 二郎氏

柄鏡 一面。

伊藤 修郎氏

土師器皿 一個。（千葉縣古城村宿内發見）。

井上 敬一氏

宋胡錄壺 一個。

井上 鶴吉氏

獨鈷石一個及土器片。（栃木縣船生村發見）。

今宮 新氏

異形石冠 一個、小形土師器 五個。

内田 賢一氏

磨製石斧一個。堀之内式注口土器一個及その中にありし袖珍磨製石斧四個。（東京都八王子市櫻塚出土）。

江良 鐵太郎氏

龜ヶ岡式土器一個（青森縣龜ヶ岡出土）。

遠藤 尹氏

石鏃類 四〇個 (福島縣郡山市附近採集)。

賀来 壽一氏

竹島 國基氏

古瓦 (奈良時代) 一個 (福島縣好間町出土)。

土偶 二個。東京都世田谷區千歲船橋及神奈川縣鶴川村發

中川 四平氏

古錢 三三個、ラマ經典 一卷。

見。前者は稻荷臺式土器に伴う我國最古の土偶と考えられるもの。須惠器土師器各一個。同區喜多見古墳群出土。

中村 勇氏

金井 益二氏

出雲地方舟模型 二個。

獨木舟斷片一個 (埼玉縣和土村元荒川發見)。

根本 忠孝氏

小仁所 左門氏

獨鈷石 一個 (福島縣川前村出土)。

古瓦 (奈良時代) 二個 (常陸國分寺、同新治廢寺出土) 繩文

野口 義麿氏

式土器片、石器、土製品 (茨城縣小川町周邊採集)。

土師器甑 一個 (東京都深大寺)、杵 一個 (奄美大島現用)。

酒井 忠純氏

林田 典雄氏

龜ヶ岡式土器二個 (山形縣泉村出土) 獨鈷石一個。

古瓦 (奈良時代) 二個 (肥後國分寺發見)。

榊原 千代吉氏

平山 忠義氏

古常滑 椀 一個 (常滑古窯發見)。

須惠器 一個 (千葉縣古城村橫穴發見)、田戸式土器尖底 一

笹津 備洋氏

個 (千葉縣古城村出土)。

前期彌生式土器一個 (沼津市愛鷹出土)、滑石製品殘片 (千葉

藤田 實氏

縣郡町古墳群採集)。

石器類 二二個 (茨城縣新治村附近採集)。

佐野 淡一氏

二川中學校有志

諸磯式土器一個 (横濱市矢上貝塚)。

獨木舟 一隻 (千葉縣大總村出土)。

藪田 芳雄氏

船橋 岩雄氏

古瓦 (奈良時代) 一個 (群馬縣山際瓦窯址)。

石鎗 一個。

松井 馬之丞氏

土師器 二個、石鎗 一個（青森縣名川町發見）。

宮田 松之助氏

大形丁字頭勾玉 一個。

森 秀雄氏

繩文文化滑石製品 約二〇個（富山縣上市町極樂寺採集）。

山崎 長榮氏

石鏃 一〇個（福島縣久之濱町附近採集）。

山中 次郎氏

須惠器 二個。

山本 博氏

彌生式土器片（遠賀川式） 一一個（大阪府瓜破發見）。

吉田 小五郎氏

須惠器 二個。石皿及磨石（東京都西秋留出土）。

渡 恭一氏

石庖丁 一個（熊本縣西合志村發見）。

以上の如き多くの方々の助力を得て、研究室所藏の資料は着々と整備されつつあるが、我々としては更に努力をいたし、多くの研究成果を擧げるべく覺悟を新らたにしている。同時に設備の整った博物館の建設が要望されると共に、そのためにも今後一層の御援助を切望する次第である。

（清水 潤三）

「改曆辨」の効用と流布

明治六年、新政府は曆法を改めて太陰曆を廢し、新たに太陽曆を採用することとした。このとき、福澤諭吉はいちはやく「改曆辨」一編を世におくり、つとめて懇切平易にそれを説明し、右の布告の趣旨徹底を期して、よそながら新政の盛事をたすけたといわれる。しかも、傳うるところによれば、この「改曆辨」は少しく風邪におかされて臥床中のところおよそ六時間で書きあげられたものだそうである（「福澤全集緒言」參照）。明治五年十一月官許、翌六年一月一日の發兌にかかり、和紙袋綴、本文十葉を出でぬ小冊子に過ぎないが、恰かも時宜になつて大いにひろまり、かつそれだけまた効果も甚大であつたものといえよう。福澤はそれにつき後に、明治十二年三月四日附松田道之宛書翰のなかで、「其後改曆の令あり此時も同様唯一片の詔にて更に諭告文を見ず余り難堪存候に付生は私に改曆辨と申小冊子を出版して一時は十萬部計り國內に分布し此出版にては聊か行政の便を助けたること今日も私に自負の意あり」（「續福澤全集」第六卷五四五頁）と自らいつているほどなのである。

ところで、この「改曆辨」のそうした効用と流布という點で、いささか興味深い一つの例がここにある。それは、明治六年二月、